

姫路ケーブルテレビキャスター

吉川 佳代(よしかわ・かよ) = 姫路市

神戸新聞を読んで

「いのち」取り上げる覚悟



深いテーマ「いのち」。

連載「いのちをめぐる物語」を身につまされる思いで読んでいます。流れるようにまとめられた文章がつづられる。読みながら私は心の隅に何かが引つ掛かっていた。

8月24日付の第2部「家に帰ろうよ。」第13回を読み、その「何か」に気付いた。鳥取市の「野の花診療所」院長、徳永進医師の言葉が紹介される。「死は痛々しいもの。その部分を隠して、家で死ぬのを美化してはいけないよ」。この言葉に記者は「はっとさせられた」という。

初めて記者の生の声に触れた気がした。これまで記者の思いはあまり表に出てこず、現場の光景が淡々と描かれるスタイルだった。「必ず迎える『死』についてあなたも考えたことがありますか?」。

そう問われていると読み進めてきたが、この生の声で記者たちも自問自答しながら取材していると知った。読者への問い掛けだけではない。「いのち」と向き合う書き手の姿勢も問われている。

連載は第1部「死ぬって、怖い?」、第2部「家に帰ろうよ。」と続いている。最期を迎えた人、看取った人、支えた人。取材陣が出会った人々の言葉や様子をどう表現するか。取材先との信頼関係と伝えたいという思いは大前提だが、広い視野で全体を押さえるながら、個別のケースから見える課題に切り込むことが求められる。

7月31日付朝刊3面「平均寿命最高更新」の記事で、男性が81・25歳、女性が87・32歳であった。超高齢社会の今、地域メディアとしての役割は何か。私はこれまで、生き生きと活躍する高齢者を取材してきたが、踏み込むべきテーマがあるということをも今回の連載は気付かせてくれた。

病死や事故死、自殺、不条理な死……。死をめぐる状況は不透明な現代社会を反映し、混沌(こん沌)としてい。ましてや今は超高齢社会。死は極めて身近な存在でありながらも、不透明な社会の中に、大事な命がほやけている。

「生」や「死」をテーマに、新聞やテレビ、雑誌など多くのメディアがさまざまな角度で取り上げてきた。迫真のノンフィクションも多数出ている。

「なぜ今、あえて『いのち』をテーマに捉えるのか」。同じ地域報道にかかわる立場として、読者に近い舞台でこのテーマを扱うには覚悟が求められると感じる。

6月2日付の連載初回に『命』の終わりに目を凝らしたい。死について考えることは、生き方を問うことでもあるとあった。「生き方」を伝えるという記者の覚悟とは。時代をえぐる問題意識とともに、兵庫の読者の共感や納得を大切に物語をつづってほしい。

この批評は夕刊4版、朝刊14版に基づいたものです

2019.9.8 神戸新聞朝刊

物事には人の数だけ正論・異論がある。ことに命のやりとりには述べることに大きな勇気と読み取る側も広い視野が必要で、重いつだけ深みを感じて考えてほしいものです。